

ジャンプ！ジャンプ！ジャンプ！

城口千純

タロは毎日同じ空き地で、ひたすら飛び続けていました。
天へ向かうように、高く、高く。
タロが飛んでいる足下は、そこだけ草がなくなって、土が硬くなっています。

空き地の向かい側には、赤い屋根の家があります。
その家の少し高い壁のうえから、木々が顔を覗かせ、タロのジャンプをいつも眺めていました。

町のみんなは、夕口にいます。

「もう飛ぶのはやめたらいいのに」

でも夕口は誰の言葉にも耳を貸さず、飛び続けていました。

ある日のこと、町の人が空き地の前にさしかかりました。
今日も夕日は飛んでいました。

そのとき、空から雨が落ちてきました。
町の人が手のひらを上にして雫に触れると、暖かく感じました。

そらを見上げると、夕口が飛び上がるのが見えました。
雨だと思ったものは、夕口の涙でした。

まもなく夕口は飛ぶことをやめました。

そして立ち尽くしてたくさんの涙を流しました。

一晩の間ずっと泣きつづけ、涙が枯れはてたころ、草のなくなった地面には、夕口の涙で水溜りができました。

まもなく夕口は飛ぶことをやめました。

そして立ち尽くしてたくさんの涙を流しました。

一晩の間ずっと泣きつづけ、涙が枯れはてたころ、草のなくなった地面には、夕口の涙で水溜りができました。

赤い屋根の家のドアが開きました。
出てきたのは、真っ黒な洋服を着たおばさんでした。
おばさんはタロに向って深く頭を下げてから言いました。
「ミイちゃんは天国へ行ったのよ」

タロが毎日飛んでいたのは、壁のむこうで寝たきりだったミイちゃんを見るためだったのです。

太陽が水溜りを照らすと、空き地の上に虹が見えました。
天国のミイちゃんが、タロのために作ってくれたのかもしれない。

タロは最後にもう一度、いままでで一番高く飛びました。
大好きなミイちゃんのために。